
元バカとテストと召喚獣 + カオスなFクラス

ノッポガキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

元バカとテストと召喚獣+カオスなFクラス

【Nコード】

N3259Z

【作者名】

ノツポガキ

【あらすじ】

バカテストの再編です。

明久×瑞希なのでそれを許せる方のみお入りください。
基本、オリキャラは登場しないです。

玲が最初から登場してたり、Fクラスのメンバーが違っていたりとかオスなことになる予定です。

明久がもしもあの場面で瑞希の会っていたら的なストーリー。
玲が教師だったり、Fクラスにあの人たちがいたり……そんな物語。

作者はハーレムが苦手です。あと、島田美波さんの出番が減るかも？

警告タグは念のため。

第一問 いままでのあるすじという名のプロローグ（前書き）

やってしまった……思いのほか筆が進むんだよ。

バカテストは要望があればやります。

ない場合は、気が向いたときだけたまりにやるかな？

第一問 いままでのあらすじという名のプロローグ

これは、僕が2年生に進級するまでの話だ。

ある日、葉月ちゃんって言う女の子が困っていて、それを助けるためにいろいろあったんだけど……それは割合。

問題なのは、葉月ちゃんが僕の頬にキスをしたあとのことでした。

「明久くん……何してるんですかあ？」

「ひ、姫路さん……なんか笑顔が怖いよ!？」

そう、なぜか姫路さんがものすごく怖い笑顔で迫ってきたんだ。

4

「あれー？　なんで昔みたいに瑞希ちゃんって呼んでくれないんですかあ？」

「い、いやその……」

「な・ん・で・す・か？」

「……み、瑞希ちゃん」

「よろしい」

いったい、何が起こっているんだ？

「それで、さっきのは一体どういことですか？」

「いや、僕にも何がなんだか……」

「どういことなんですか？」

「いや、だから……」

「どういことなんでしょうか？」

だからその笑顔はなんなの!?

「バカなおにいちゃんとキレイなおねえちゃんは恋人なんですか？」

そこで、葉月ちゃんが爆弾発言。

「ふえええ!?!」

「い、いや、それちがつ」

「……じー」

なんか、半開きの目で睨まれているんだけど!?

「葉月は……諦めません!」

そう言っ葉月ちゃんはどこかへ行ってしまった……何を諦めないんだろっ?

「それで、明久君……ちょっとO H A N A S H I I しましょうか」

「はい……」

そのあとの出来事は怖かったけど、姫路さ……瑞希ちゃんとまた話せるようになったのはうれしかった。

なぜかその日から毎日勉強を一緒にしているけど……なんでだろう？

そして、ある日の出来事。

それにしても、瑞希ちゃんはなんで僕に勉強教えてくれるんだろう？

（明久君と一緒にのクラスになりたいからですよ）

なんだ？　なんか聞こえたような……

「瑞希ちゃん、何か言った？」

「いえ、何も言ってますよ」

そのとき、インターホンがなる音がした。

「あ、はい！」

玄関を開けると……姉さんが立っていた……なぜかメイド服姿で。

「つて、姉さん！？」

「ただいま帰りましたアキ君」

「いや、なんでここにいるの!？」

「コチラで教師をすることになりました、今日から私もここで暮らします」

「……Really？」

「はい」

なんてこった……

「明久君、どうかしたんですか？」

あ……しまったあ!？

「アキ君？」

「姉さんこれは不順異性交遊じゃないんだ、一緒に勉強していただけなんだ、だから命だけは!！」

「……そうですか………一緒に勉強を」

マズイマズイ……

「あの………」

「どうも初めまして、吉井明久の姉の吉井玲といます」

「あ、はい。姫路瑞希といます」

普通に会話しているけど……大丈夫か？

「それじゃあアキ君、いつものようにお医者さんごっこを」

「してないからね!？」

「明久君とお医者さんごっこをするのは私です!！」

「瑞希ちゃんもなに言ってるの!？」

とんでもないことを口にしてるよ!？」

「そういえば、もうお昼ですね。アキ君、今日は姉さんが作ってあげましょう」

「いや、別にいい　って、関節を外さないでください!！」

なんでいきなり間接を外すの!？」

「なら、いつものお礼で私が作りますね」

「え!？」

マズイマズイ……この前瑞希ちゃんの料理を食べたけど……あれはヤバイ。

命的意味で。

「それなら、二人で作ってアキ君に食べ比べてもらおうというのはどうでしょうか?」

「ああ、それなら」

なんで、そんな最悪の方法で和解するの!？」

「じゃあ、まっけていてくださいね」

「アキ君、くれぐれもキッチンを覗かないでくださいね」

お、終わった………僕の命が………

結局、瑞希ちゃんや姉さんも自分が作った料理を食べてしまい、自分達の料理の危険性を理解は出来た……直るかどっかは別として。

頑丈な体で助かったとだけ言っておこう。
ギャグ補正な気もしないでもないが……

そして、ある日のこと……

「姉さんに無断で女の子を家に上げていたのですから罰を与えます」といって……なぜか、文月の女子用の制服を着させられた。

「なんで、女装させられてるの!?!」

「かわいいですよアキ君」

「そうですよ明久君」

「なんで瑞希ちゃんもいるんだ!?!」

「私が呼びました」

「姉さん!?!」

いつものまに!?!?

「それでは、お買い物に行きましょうか」
「そうですね」

「あの……僕の服は？」

「今日は一日中その格好ですよ」

「そ、そんなあ!?!」

ちなみに、二人は今日こそリベンジだと食材を買おうとしていたため、全力で二人が変なものを買わないようにしないといけなかった。

おかげで、自分の格好のことが頭から抜けていた。

「!?!? 見つけた……運命を……アキちゃんを!?!」

途中、悪寒が走ったのは気のせいだと信じたい。

なんとか、危険なものを避けたけど……二人とも、食べられるものとそうでないものの区別ぐらいつけてよお願いだから。

「まったく、アキ君はそんな調子で今度の振り分けテストは大丈夫なんですか？」

「そうですね、頑張って教えたんですからいい点とってくださいね」

うう、耳が痛い……

「大丈夫だよ、日本史と世界史なら瑞希ちゃんよりとれる自信はあるから!」

なんか、この二つだけは異常に成績が伸びた……理数系はそれほどでもないけど。

「まあ、今の成績なら……」

「そうですね、アキ君は頑張りました。ですが、本番で名前の欄にアレキサンドレス大王とか書きそうで心配です」

「いくらなんでもそんなミスはしないから!!」

大丈夫……のはずだ。

「そういえば、姉さんはどこの学校の教師になるの?」

「文月学園ですよ。いいませんでしたか?」

「初耳だよ!!」

っていうか、なんでよりもよって!?

「アキ君が心配だったからに決まっているじゃないですか」

「そんな理由!？」

「あと、ついでに大学のほうに誘いが来ていたんですけどね」

「そつちを理由にするべきだよ?!」

この姉は勉強だけは出来るからな……そのぶん、一般常識に欠けるけど。

そして、振り分け試験当日。

瑞希ちゃんが熱を出してしまい、試験どころではなかった。

「はあ、はあ……退席、します」

「姫路、振り分け試験を途中退席すると0点だぞ」

「……そんなのおかしいじゃないですか!」

「吉井、貴様も無得点扱いにするぞ」

「ぐ、それでもいいです。行こう瑞希ちゃん」

「明久、君……」

僕は瑞希ちゃんを背負い、保健室へ向かった。

「ごめんなさい……私のせいで……明久君も頑張ったのに」

「いいんだよ、それに……」

「それに?」

「瑞希ちゃんとおなじクラスのほうがうれしいし」

「……// // //」

「顔真つ赤だけど大丈夫?」

「平気です……// // //」

そして、ここから先は僕の知る由もない話だ。

僕達が途中退席したのを見て、ある三人の女の子があることを思い
ついでしまった。

「途中退席……Fクラス……雄二は絶対にFクラスに行く……名前
を書かなければFクラス……雄二と一緒に……」

「Fクラスならアキちゃんがいる……無得点ならアキちゃんとおなじクラス」

「お姉さまはたぶんFクラス……豚野郎度もがいるのは嫌ですが、お姉さまとおなじクラスのためなら!」

僕とは全く関係のない人もいたけど、何か、とんでもない出来事が起こったのは間違いない。

「まったくアキ君は」

「じめん、姉さん」

その日、姉さんに怒られています……まあ、仕方がないよね。無得点扱いで0点だし。

「ですが、姉さんは誇らしいです。そこで何もしないよりはずっとマシだと思っていますよ」

「姉さん………ありがとうございます」

そして、今日から2年生だ。

「吉井、遅刻だぞ」

「て　西村先生、おはようございます」

「今、鉄人と言おうとしなかったか？」
「気のせいですよ」

まったく、するどい。

「それより言うことがあるんじゃないか？」

「えっと……今日も肌が……じゃなくて遅刻してスイマセン」

「肌がなんだったって？」

「いえ、なにも」

「まったく、ほれお前のクラスだ」

そう言つて、鉄人は封筒を手渡した。

「せっかく、成績も上げてきていたのに残念だったな」

「いえ、自分で選んだことですから」

「そうか……だが、俺はお前のしたことは人としてよかったと思うぞ」

「先生……ありがとうございます」

「ところで……お前の姉はいつもあんな感じなのか？」

「ええ……もう、諦めるしかないのかもしれないかもしれません」

「……お前も苦労してるな」

封筒の中身は見ないでも分かっている……僕は封筒の中に書かれているクラスへ向かった。

僕の封筒の中にはこう書かれている。

『吉井明久 Fクラス』

こうして、僕らの最低クラスでの生活が始まったのだった。

第一問 いままでのであらずじといつ名のプロローグ（後書き）

次回はFクラス。

どんなカオス展開になっているのやら。

感想お待ちしております。

第二問 これがFクラスだ！（前書き）

うまく出来ているといいなあ……

とりあえず、自己紹介のくだりです。

第二問 これがFクラスだ！

Aクラスの前を通ると、とんでもない光景が広がっていた。

「個人液晶に、冷蔵庫にほかに色々……やりすぎじゃないの？」

Aクラスの設備はとんでもないほどにいい設備だった。

『では皆さん、設備の不備はありませんか？』

学年主任の高橋先生がそう言っていた……っというか、不備を探す
ほうが難しいんじゃないかな？

『それではクラス代表の木下優子さん前へ』

『はい』

あれは秀吉のお姉さんかな？

本当にソックリなんだな

あれ？ てつきり去年の学年トップの霧島さんが代表だと思ったの
に……いないみたいだ。

遅刻かな？

「まあ、関係ないか」

そういえば、霧島さんって同性愛者って噂があったよね。
まあ噂は所詮噂っていうけど……火のないところに煙は立たないっ
ていうし。

「うーん……」

「どうかしたんですか明久君？」

「あれ？ 瑞希ちゃん？」

いつの間にか隣に瑞希ちゃんがいた。

「いや、なんでもないよ」

「そうですか」

「それより、なんでここに？」

「先ほどまで保健室にいたので」

「そうか……」

「ねえ、体のほうはもう平気？」

「はい、おかげさまですっかり大丈夫です！」

「よかった……」

「じゃあ、いこっか」

「はい！」

「アレ？ 迷ったのかな？」

「明久君……迷ってませよ」

「そつだよね……」

なんだこの廃屋は？

「これがFクラス……」

「あ、あははは……」

苦笑いするしかないか……

そして、瑞希ちゃんがFクラスの扉を開けた。

「おくれてすい」早く座れ蛆虫野郎……！？」ませ……ほええ？

目の前のゴリラが飛んでもないことを言った。

「総員、狙え……！」

「さて、何故出会って間もない奴らなのに連携がそんなに取れているんだ！？ っていうか、上履きをかまえるな……！」

ゴリラ……いや、僕の悪友の雄二がなにかごちゃごちゃ言ってるけど……

「うるさい……！ 瑞希ちゃんを泣かせた罪は重いぞ……！」

「俺は明久に言ったんだ……！ それにお前はいつから姫路のことを名前で……姫路？」

なんかややこしいことを言われそうになったけど、雄二は瑞希ちゃんがFクラスにいることのほうが気になったらしい。

「実は、試験の日に熱が出て途中退席してしまって」

教室中からなるほどーと言った声上がる。

『実は俺も熱（の問題）が出たせいで』

『ああ、科学は難しかったな』

『俺は妹が遊んでって言うてきてさ』

『黙れ一人っ子』

『黙れ！ ミサキちゃんは俺の心の中にいるんだ！』

『実は前の晩に彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとうよ異端者（笑）』

なんか、馬鹿ばかりだ……

そして、教室のドアが開き先生が入ってきた……って、まさか！？

「早く席についてください」

『『巨乳美人教師キタアアアアアア！！！！！』』

Fクラスの皆が何か言っていたけど気にならない……だって、

「姉さんがなぜここに！？」

「あ、玲さん！？」

あの姉さんがなんでFクラスに！？

「それは姉さんがFクラスの担任だからですよ」

普通、新米教師は担任なんか出来ないと思うんだけど……鉄人辺り

が妥当だと思ったのに。

「姉さんが志願しました……Fクラスは新任でもいいそうなので最低設備だからこそか……」

『それより、アイツ……姉さんだとかなんとか言っていなかったか？』

『ああ、言っていたな……』

『異端者め……』

なんだろう……クラスの皆を敵に回した気がする。

「それより、早く席につけてください。さもないとアキ君、姉さんがアキ君に「いえ、席に着きますので勘弁してください」……アキ君は意地悪です」

キス魔に言われたくない！！

「あれ？ 席は決まってないの……しかも畳にちゃぶ台って」「それがFクラスです」

マジかよ……

とりあえず、適当な場所に座る。

右隣には瑞希ちゃんが座った。そして、左隣には、

「明久、おまえ姉貴がいたんだな」

そう、雄二ユウジがいた。

「おい、いま変なこといわなかったか？」

「気のせいだよ」

感が鋭いやつめ……

「っていつか、お前の姉ってどんな人なんだ？」

「……………」

「すまん、お前も苦労しているみたいだな」

気がついたら目から何か熱いものが……

「どうも皆さん。吉井玲といます。教師にはなつたばかりですが頑張りますのでよろしくお願いします。ちなみに、主に英語を担当する予定です」

とりあえず、姉さんの変人っぷりが出ないことを祈ろう……

「みなさんの設備に不備はありますか？」

『俺の座布団に綿があまり入っていません』

「我慢してください」

『窓ガラスが割れてます』

「今は我慢してください。あとでガムテープを申請しておきしょう」

『ちゃぶ台が壊れています』

「ボンドがあるので自分でなおしてください」

『彼女がいなくて心がさびしいです』

「諦めてください。そして、極力自分達で何とかするように」

本当にヒドイ設備だな……瑞希ちゃんは大丈夫かな？

ってというか、姉さんも終始笑顔で凄いな……

「それでは、廊下側の人からどうぞ」

姉さんがそういうと、最初の人が立ち上がる。
つて、アレは……

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

僕の悪友……秀吉は親友かな？ まあとにかく、友達の一人、の木下秀吉。

見た目は美少女だけど……

「ちなみに、一つ言っておくとわしは男じゃからな」

『『ウソダアア!!?』』

そう、あれでも一応男……はじめてあつたときは分からなかった……ってというか、初対面で分かる人はいるの？

「……………土屋……………康太」

次の無口な奴も友達の一部。

ただ、ポケットに入っているものをどうにかして欲しい。

「……………趣味はとうさ……………なんでもありません」

一部で有名なんだけど……まあそれは置いておこう。
気にしないほうがいいだろう。

「……からの帰国子女で日本語は苦手です。趣味は」

今度は女の子の声だ。良かった、瑞希ちゃん以外の女の子も……帰国子女？

「吉井明久を殴ることです」

「し、島田さん……」

「ハロハロツ」

島田美波さん……一応、友達だけど……なぜかいつも殴ってくる僕の天敵。

「……島田さん」

「なんですか先生？」

「……二コッ」

「!？」

姉さんがものすごく怖い笑みを島田さんに向けた……とりあえず、殴られなくなりそうだな。

「姫路瑞希です。趣味は料理です。よろしくお願いします」

今度は姫路さんが自己紹介した……でも、その趣味はやめて欲しい。僕の命的な意味で。

そして、僕の番になる。

「どうも、吉井明久です。特技は料理でパエリアが好きです」

一応、無難な自己紹介をしておいた。

「以外だな明久、お前のことだから「ダーリン」とでもよんでくだ
さいっていうかと思っただのに」

「さすがにそれはないよ」

「……なんか、お前変だぞ？」

「どこが？」

「昔と比べて馬鹿じゃない」

「なんだと!？」

僕達が言い争いをはじめようとしたとき、教室のドアが開かれた。

そして、そこにいたのは……

「……おくれてすみません」

「ちよつと道がこんでいましたので」

「寝過ごしてスミマセン!」

「あはは、転入の説明とかあつて遅れましたー」

四人の女の子がいた。

そして、その中の一人……長い黒髪の人はまさか!?

「では、自己紹介をして下さい」

まずはショートカットの女の子が前に出た。

「ボクは工藤愛子つていいいます。本当はもう少し前に転入する予定だったのが遅れてしまい、Fクラスになりました。これからよろしくお願いします。ちなみに、得意科目は保健体育です……実技もね」
『『ウオオオオオオオ!!!!』』

なんか、変な特技が付け加えられたような……

次は、ドリルのような髪の子が入ってきたけど……島田さんが絶句しているけどどうしたんだろっ？

「清水美春といいいます……この教室の豚野郎どもに言っておきます」

豚野郎？

「美春と島田美波お姉さまの邪魔をする奴は容赦しませんのでそのつもりで」

お姉さま？ なんだか島田さんが遠いところに……

「美春！ ウチのことは諦めてって言ったでしょ!!」

「お姉さま！ 美春は絶対に諦めません!!」

「島田さん……お姉さまって」

「ち、違っのよ吉井!!」

「邪魔をする豚野郎は……」

「美春、これ以上ウチの迷惑になるようなことをするなら……これからは清水さんって呼ぶわよ」

「美春が間違っていました!!」

なんか、ツッコんじやいけないんだろうな。

その次に、髪をお下げにした女の子が前に出た。
見た感じは普通の女の子だな。

「はじめまして、玉野美紀です……好きな人はアキちゃんです」

前言撤回。絶対に変な人だと思う。

なぜかって？ 彼女がアキちゃんって言った瞬間、僕の体にもものすごい悪寒が……

「あ、アキちゃ……吉井君!!」

「まって、僕はアキちゃんではない!!」

ってというか、僕のこと!?

「そうだよ、アキちゃんはこの子だよ!!」

そう言っつて玉野さんが持っていた写真を皆に見せる……っつてこれは!?

「なぜ、この写真を!？」

「このまえ偶然街で見かけて……」

写真を撮られていたとはうかつだった……

『どうする？ 異端者に入るのかこれは？』

『いや、アキちゃんならいいだろ』

『そうだな、アキちゃんならいいか』

『ああ、むしろアキちゃん最高だな』

バカしかいないのか!?

あ、だからFクラスなのか……

「これは……//」

「ふむ……//」

あれ？ 瑞希ちゃんと姉さん？

「いくらで焼き増しですか!？」

「ない言ってるの二人とも!？」

「撮影に協力してくれるなら」

「玉野さん!？」

「……俺にも一枚かませろ」

「ムツツリーニ!？」

土屋康太こと、ムツツリーニ……彼の写真時術は学園一だ。

「なるほど、それなら良い写真が撮れそうですね」

「しまった!？ 声に出ってたのか!？」

墓穴を掘ってしまった……

そして、最後に長い黒髪の美少女……彼女も本来ここにいるはずのない人間。

「……霧島翔子です」

学年トップの霧島さんだった。

「しよ、翔子!？」

あれ？ 雄二？

「なんでお前がここにいるんだ!？」

「……雄二はFクラスに入ると思った。だから名前書かなかった」

え？ どういうこと？

「……文月に入ったのも雄二がここ来たから。雄二が高校に行かないなら私も行かない」

……つまり、雄二を追いかけていたってこと？

「おまえなあ……」

「……雄二、浮気したら殺す」

「お前と俺は付き合ってない!!」

つまり、同性愛者の噂は……所詮噂だったということか……っついてい
うか、一途だなあ……やっぱりむかつてきたな……

ただ、今分かっていることが唯一つ。

『異端者め……霧島さんと仲良くしゃがって……』

『殺してやる……』

『クフフフフ』

雄二の命が風前の灯だということだけだ。

ちなみに、僕は姉さんがいるからやたら滅多なことではできないけど。

「みなさん、落ち着いてくださいね」

そう言っつて姉さんが教卓を叩く……すると、

ガラガラガラ

そんな音と共に教卓が壊れ去った。

「あら？ 急いで代えの教卓を持ってきますので待っていてくださいね。あと、ついでにチヨークも取ってきます」

よ、予想以上にヒドイ設備だな。

「ねえ、雄二ちょっといいかな？」

「なんだ？」

「ここじゃ話しにくいから廊下で」

このとき、僕にはある決意があった。

そのためにはコイツを焚きつけるのが一番だろう。

「で、なんのようだ？」

「雄二でしょ、クラス代表」

「勘がいいな。その通りだ」

「ねえ雄二、試召戦争をやってみない？」

第二問 これがFクラスだ！（後書き）

アレンジアレンジ！

極力、オリジナルの展開になるようにします。

目標は面白おかしくブレイク。

第三問 勝てる理由(前書き)

筆が進むよ

バカテストはどうしょっか……

第三問 勝てる理由

僕は雄二に試召戦争をやらなにか切り出した。

「なんだと？ いったい、何が目的だ？」

「えっと、僕の中で突然勉強が目覚めて」

「ウソだな」

「……ハッキリ言わないでよ」

「まったく、そういう所はやっぱり明久だな」

「オイコラ雄二、どういう意味だ」

「気にするな」

「まったく……」

「それより、姫路のためか？」

「……そうだよ」

「案外あっさり認めるな」

「まあ、瑞希ちゃんが途中退席したときは僕が運んだからね……直
接見てるからどうしても上位の設備が欲しいって思うんだよ」

「ん？ ってことはお前も無得点なのか？」

「そうだよ」

「……まあ、明久の一人や二人は戦力に支障が出ないだろうな」

「どういう意味だ」

「そのままの意味だ」

この野郎……

「それに、俺もやるつもりだったしな」

「雄二が？ 設備とかは興味無さそうなのに」

「まあ、そうなんだが……なーに、学力が全てじゃないことを証明
してみたくなってるな」

「そうなの？ 僕はてつきり霧島さんのためにかと思っただけど」

とりあえず、さっきの仕返しをしてやろう。

コイツのことだろうから詐欺師のように「なんの関係もないぞ」とかいいそうだな。

「そ、そんな、そんな、ことごと、ことねえYO！」

「あれ？ ラップ調！？ っていうかマジで！？」

や、やぶ蛇だったあ！？

とりあえず、雄二が落ち着いてから教室に戻るとすぐに姉さんもやってきて自己紹介が再開された。

「須川亮です。趣味は」

そして、雄二の前の人の自己紹介が終わり、最後に雄二が前に出た。

「俺はこのクラスの代表の坂本雄二だ。みんなに、一つ聞きたい」

そう言って、雄二は視線をかえる。

傷んだ畳。壊れたちゃぶ台。割れた窓ガラス。その他色々……

「この設備に、不満はないか？」

「『『『『『大アリじゃあああああ！！！！！！』』』』』」

クラスの心が一つになった瞬間だった。

『いくら設備に差があるからってこれはひど過ぎだろ!?!』

『そうだけ、Aクラスもおなじ学費だろ!?!』

『この設備に不満がある奴なんているわけねえ!?!』

「そこでだ、俺達はこれからAクラス相手に試召戦争をやるつもり!?!」

・
・
・

『でも、勝てるのか?』

『いや、無理だろ……Fクラスだし』

『勉強できないからFだからなあ……』

『姫路さんや霧島さんさえいればあとはいらぬ』

『お姉さま愛しています』

さすがFクラス……消極的だ……っていうか、変なの混ざってなかった?

「いや、勝てる! これをそれから証明する」

そうやって雄二は秀吉のほうを見る。

「まず、木下秀吉。コイツの姉のことは知っているだろう」

『木下……木下優子の弟か!?!』

『そういえば弟は演劇部のホープだって聞いたことがあるぞ!』

あ、そういえば…… Aクラスの代表になってたな、秀吉のお姉さん。

「そして、土屋康太。彼はあの有名なムツツリーニだ!」

「……………(ブンブン!)」

ムツツリーニ、それは男子には尊敬を。女子には畏怖をもって挙げられる名前。まあ、一部の女子は支持してるけど……

「ムツツリーニ……………さっき姫路や翔子のスカートの中をのぞいていただけだろ」

「あ、あわっ!?!」

「……………雄二はもうちょっと心配してもいいと思う」

「……………そんな事実は一切ない」

「ムツツリーニ……………何色だった?」

「……………水色と白なんでもない」

「うん、ムツツリーニがHなのは知っていたから」

「……………(ブンブン!!)」

『見る、あそこまで言っておいて否定するなんて』

『ああ、ムツツリの名に恥じない姿だな』

『へへ土屋君がムツツリーニだったんだ』

士気が高まっていくFクラス。

「姫路や翔子のことは言わなくてもいいだろう」

「わ、私ですか!?!」

「ああ、ウチの主戦力だ。期待している」

「……………雄二、私は?」

「ま、まあ頑張れ」
「……………分かった」

『そつだ、彼女達がいるんだ!』

『ああ、学年トップ2がいれば勝てる!』

『むしろ彼女達がいれば何処でもいい!』

『姫路さん愛しています!』

『霧島さん結婚してください!』

「……………私には雄二がいるから無理」

『NOオオオオオ!』

「だから、お前とはただの幼馴染だろうが!」

「……………大丈夫、お義母さんには認められているから」

「オフクロオオオオ!」

なんか雄二も大変そつだな……………つて言うか霧島さんって愉快な人だ
つたんだ……………

そして、瑞希ちゃんにラブコールを送っている奴はダレだ!?

「ま、まあそれに……………吉井明久だっている!」

シーン

『ダレだ? 吉井明久つて?』

『吉井先生の弟だろ』

『ああ、さっきの異端者か……………』

『いや……………』

『『アキちゃんだ!!』』』

「だからアキちゃんじゃないって!!!!!!」

想像以上のバカばかりだよ……

「教えてやろう、こいつの肩書きは「観察処分者」だ!!」

つて、雄二が僕のトップシークレットを!?

「坂本君……明久君をオチで使ったんですか?」

「ひ、姫路?」

「……ニコツ?」

だからその怖い微笑みはやめてったら!!

「い、いや……それでも利点がある。観察処分者の召喚獣は物理干涉ができ、教師の雑用として召喚獣を使うから操作技術が飛びぬけているんだ」

まあ、もっとも……フィードバックがあるからおいそれと召喚はできなけれどね。

『でも、観察処分者って馬鹿の代名詞だろ』

『だよなあ』

「大丈夫だ、いてもいなくても「坂本君?」クラスの仲間だ、大切にしよう」

なんだ? 瑞希ちゃんはさっきからどうしたんだ?

「とにかく……ウチのクラスは最強だ!!」

『『ウオオオオオオ!!』『』』

皆が手を上げて立ち上がった。

「お、おー」

「……おー」

瑞希ちゃんに霧島さんもやってる。

「よし、まずはDクラス戦に勝ってそれを証明してやる。明久、さつそく宣戦布告を」

「パス」

「なに!?!」

「いや、下位勢力の宣戦布告って使者が死者になるよね」

「なにメタ発現してるんだお前は!?!」

「それに無得点扱いだから少しでもいい点が取れるように勉強しておきたいし」

「『『……はあ!?!』『』』」

僕の友達四人がビックリした声を上げる。

「なに? どうしたの!?!」

「ありえぬのじゃ……明久の口から勉強などと!?!」

「秀吉、失礼なこと言ってるよね」

「ありえない……吉井が勉強なんて……天地がひっくり返ってもありえない!？」

「島田さん、僕のことを何だと思っているの？」

「……………カメラは何処？」

「ドツキリじゃないから!!」

「明久……つらいことがあるなら相談に乗るぞ」

「そういうわけでもないから!!」

まったく……僕をなんだと思ってるんだか。

「アキ君の去年までの成績を考えれば当然の反応です」

「姉さん……いつの間に僕の隣にいたのかとか色々聞きたいことがあるんだけど」

「気にしないでください」

「まあ、明久がやる気になっているなら……で、だれが宣戦布告に行くんだ？」

結局そうなるのか……女子には行かせられないしな……

「あ、ならボクがいつてくるよ」

「工藤さん？」

行ってくれるならうれしいけど……

「あれ？でも転入の時期が遅れたって」

「ああ、振り分け試験には間に合わなかったけどテストは受けてあるよ」

「あ、そうなんだ」

「まあ、女子だけじゃなんだ、ムッツリーニ一緒に行ってくれ」
「……………（コクリ）」

そして、二人は宣戦布告に行ってしまった。

「大丈夫かな？」

「まあ、平気じゃないか？ 工藤ってやつもムッツリーニと同類っ
ぼいし」

「ああ、たしかに……………」

まあ、少し復習をしておくか……………

「本当に勉強してやがる……………」

「天変地異の前触れかのう？」

本当に僕のことを何だと思っているんだろう？

・
・
・

そして、ムッツリーニたちが帰ってきたけれど……………

「ムッツリーニー！？ どうしたのその血はー！？」

「顔中が血だらけだぞー！？」

だれだ！？ ムツツリー二にこんなことをしたのは！？

「ごめん、ちょっと遊びすぎたらムツツリー二君が鼻血を出して

「出して鼻血かよ！？」

やっぱり、ムツツリー二はムツツリー二なんだね……

「っていつか、工藤さんは何をやったの」

「ちょっと特技のパンチヲを」

「……」

おかしい、それは特技に含めていいものじゃない。

「あれー？ ボクの特技が気になるのかなー？」

うん、気になるはなるけど……

「「「「」」」」

後ろから殺気が三つぐらい出ているのが気になる……

「なんなら確かめてみる？」

「え、遠慮しておきます」

僕も命が惜しい。

「で、宣戦布告は？」

「……………今日の午後からだ」

「なら、ミーティングも兼ねて屋上で昼飯を食べるぞ」

そう言いながら僕らは屋上へ上がっていく。

メンバーは僕・瑞希ちゃん・雄二・秀吉・ムツツリーニ・島田さん・霧島さん・工藤さん・清水さん・玉野さん・姉さん

って、

「なんで姉さんがいるのさ!？」

「あら、教師と生徒の親睦を深めるためですよ」

「ぐっ……………正論だから否定できない……………」

それにしても大所帯だな……………女子の比率が多いし。

今頃教室では残っている人たちが血の涙を流しているんだろうな……………

そして、屋上の扉を開ける。

「気持ちいですねー」

ムツツリーニ……………さっきから瑞希ちゃんのスカートの^{姉さん}中を覗こうと
してるけど先生の前だって分かっている？

「……………(サスサス)」

「ムツツリーニ、畳の跡なら消えているからね」

「……………ッ(ブンブン)」

「大丈夫、ムッツリーニがHなのはみんな知ってるから」
「……………違う」

「さて、まずは昼飯を食うか」

「そうだね」

「明久、たまにはちゃんとしたものを……………いや、今は一人暮らしじゃないからそんなこともないのか。さっきも料理が得意って言うていたが、本当か？」

「うん、今日も僕が作ってきてるしね」

姉さんは作れないし。

「まあ、アキ君の料理はおいしいですからね」

「先生のぶんも吉井が？」

「ええ」

「確かに明久君のお料理はおいしいですからね……………プライドがスタボロになるくらい」

なんか、瑞希ちゃんが暗いけどどうかしたのかな？

「吉井、ちよつと味見させて」

「いいけど……………」

「豚野郎の料理を食べるといっのですか!？」

「やっぱり今日から清水さんって」

「いえ、美春はお姉さまの味方です」

清水さんとひと悶着あったけど島田さんは僕のお弁当のおかずを一つとって食べた。

「……………」

「あれ？ 島田さん？」

「お姉さまどうしたのですか？！ ハッ！？ まさか毒を！？」

「入れてないから！！ そこまで言うなら清水さんも食べてみればいいじゃないか！！」

「ふん、本来なら豚野郎の作った料理など食べませんが……………」

そっぴいながらも一口。

「…………ま、負けた……………」

清水さんはorzの体勢になってしまった。

「そんなにうまいのか？」

「ワシも食べてみたいのう」

「…………興味津々」

「ボクも食べてみたいなー」

「アキちゃんのお弁当アキちゃんのお弁当」

うん、なんか変なものだけど結局皆でトレードして食べることになった。

さすがに瑞希ちゃんや姉さんレベルで下手な人はもういないみたいだった。

・
・
・

「そっぴえば雄二、なんでDクラスとやるの？」
「ああ、この戦力ならEクラス相手なら負けないしな」
「でもFクラスだよ」
「明久、周りのメンバーを良く見てみる」

えーっと……

「美少女に雄二の婚約者にバカとムツツリに美少年、それから同性愛者とお姉さまと変な人と転校生、それから僕の姉がいるね」

「おいまして明久……いつから翔子は俺の婚約者になった」

「あ、ごめん」

「……そう、私は雄二の妻」

「待て翔子、俺達はまだ付き合ってますらない」

「まだってことは、これからは違うの？」

「そ、そんなことあるわけ無いだろうがぁ……！」

まったく、雄二は素直じゃない。

人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて死ぬって言うし、僕は霧島さんを応援しよう。

「っていつか、お姉さまって何よ」

「お姉さまはお姉さまです……！」

「美春、アンタのせいで吉井に変な誤解を」

「お姉さまに害虫がつかなくて美春は安心です……！」

向こうでは二人がコントみたいなのをやっている。

「よかった……明久はワシを男としてみてるのじゃな」

「まあ、あの姉さんと暮らしているうちにもっとしっかりしようっ

て思っていたらいつの間にかね」

「何処の家も姉で苦労するのが弟なんじゃろつな」

「ああ……それで親近感が」

秀吉も苦労してるんだな……

「そういえば秀吉のお姉さんクラス代表だったよ」

「そうじゃったのか？」

「あれ？ 知らなかったの？」

「うむ、そうだったことはあまり話さないのだな」

そういえば、ちょっとカオスになってきたかな……

そこで、雄二が締めるように次の言葉を言った。

「ま、まあとにかく……ウチのクラスは 最強だ」

こうして、僕たちの戦争が始まった。

第三問 勝てる理由（後書き）

人数多いな……明久視点だけじゃ回せそうにないかも。

ちなみに、ウチの明久君は周りの濃さにより少しだけしっかりしています。

そのためFFF団に所属しておらず、秀吉のことも男だと認識しています。

第四問 対決Dクラス（前書き）

バカテストをやるときはまとめて出そうと思います。

それではどうぞ。

第四問 対決Dクラス

屋上でのミーティングからしばらく経ち、試召戦争が始まった。

ここでルールのおさらいをしておこう。

原則としてクラス対抗戦。

教師の立会いの下、各科目ごとのテストの点数に応じた強さを持つ召喚獣を召喚できる。

召喚獣の点数はそのまま召喚獣のゲームで言うところのHPや攻撃力にもなる。

そして、0点になった瞬間、その生徒は……

『戦死者は補習ううううう！！！！』

補習担当の西村先生（通称鉄人。最近はおてんこさまでもいいかなと思ってる）によって補習室へさらわれる。

『趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎という立派な生徒にしてやるから早く来い！！』

『イヤダアアアアアアアア！！！？？』

先生……それって洗脳じゃ……

「アキ君、手が止まっていますよ」

「おっといけない」

ちなみに、僕は全科目が0点だったからテストを受けている。

試召戦争中に受けるテストのことを補給試験といい、僕が受けているのもそれである。

瑞希ちゃんも受けているけど………凄いスピードだ。

補給試験は召喚獣に止めを刺されない限りは何度でもつけることが出来る。

「ふう………今頃、戦場はどうなっているかな？」

・
・
・

〈島田美波・開始〉

まったく、吉井は鈍感だし美春はFクラスに入ってくるし……

「最近、不幸だわ」

「お姉さまは私が幸せにします!!」

「それが不幸だっていつてるの!!」

『いたぞ！ Fクラスだ!!』

そうこうしているうちに、Dクラスの人がきたみたい。

「美春、アンタはそっち側をお願い!!」

「お姉さまのためなら!!」

「「試獣^{サモン}召喚!!!」」
「「試獣^{サモン}召喚!!!」」

ウチたちが召喚獣を召喚するための言葉を叫ぶ。
前から現れるのは私たちの分身。
軍服を着、手には武器を持ったウチたちの召喚獣。

古典

Fクラス	島田美波	6点
Fクラス	清水美春	9点
Dクラス	マイケル	9点
Dクラス	釘宮聡史	10点

……しまったあああ!?

「おい、アイツ雑魚だぞ」
「H A H A H A! おじょうちゃんはワイが倒したるよ」

あれ? マイケルって奴、意外と日本語流暢だ!?

「お姉さまを雑魚呼ばわり……許すまじ!!!」
「っていうか、美春は補給試験受けていたの!?!」

「お姉さまのために一瞬で終わらせました!!」

「いくらなんでも速すぎよ!?!」

「それでは、行きます!!」

「ウチの話を聞いて!!」

美春が特攻を仕掛けるが、釘宮つてやつに抑えられてしまう。
そして、その際にウチがマイケルにやられた。

Fクラス 島田美波 0点 補習室に逝きな

なんか、このシステムむかつくわね……

「お姉さま!?!」

『スキあり!!』

「ああ!?!」

Fクラス 清水美春 0点

あれ? こんそは表示されないの!?!

『戦死者は補習ううううう!!!!』

「いやああああ!!?!」

「お姉さまとなら地獄の補習も天国です!!」

（島田美波・終了）

吉井明久・再開

さてと……大体できたかな。

「採点お願いします」

「はい」

さてと、次のテストも受けておくか。

出来れば僕も戦場に行きたいけど、点数がないとすぐに戦死だしね。

『坂本！！ 船越先生を呼び出したってDクラスの連中が！！』

そこで須川君がやってきた。

どうやら、数学の船越先生を呼び出したらしい。

あの先生は色々と危ない話がある……単位を盾に交際を迫ったりとか。

『そうか、なら偽情報を流せ』

『どんな偽情報だ？』

『……そうだな……ニヤリ』

そこで雄二は僕のほうを見て嫌な笑みを浮かべた……まさか僕を売るつもりか！？

『坂本君、人をだますのは感心しませんね。霧島さん、少しいいですか？』

『……分かりました』

『まっつてくれ翔子！！ 俺が悪かった！！』

あ、そういえば霧島さんたちもいたんだっ……

『……雄二、ここは私に任せて』

『テストは大丈夫なのか？』

『……雄二のためなら朝飯前』

まったく、うらやましい奴だ。

そして、そのまま霧島さんは戦場へと行った。
そのあと、

『なぜ霧島さんが!?!』

『なんでFクラスなの!?!』

『勝てるわけないじゃないか!?!』

とか聞こえてきた……まあ、実質的な学年一位だしね。

っていうか、力技で押し切ったのか……

「さて、次は僕の得意な世界史をやるのかな」

・
・
・

（木下秀吉・開始）

あ、ありのままに今起こったことを話すのじゃ。

まず、数学の船越教諭が来たと思ったら、Fクラスのほうから霧島

がやってきてDクラスをなぎ倒し始めたのじゃ……まさか、力わざとは……

「た、助かったのじゃ」

「……雄二のため雄二のため雄二のため」

……これは俗に言うヤンデレというやつなのかのっ？

このような美人に愛されて雄二は幸せ者じゃな。

〈木下秀吉・終了〉

〈吉井明久・再開〉

「なんだか、秀吉にツッコミたくなってきた……」

「何を言っているんだよ雄二」

「いや、なんでもない。それよりも明久、お前テストは？」

「もう終わったよ」

「そうか、終わったのか……」

「雄二、諦めたわけじゃないからね」

「なんだと!？」

「意外そうな顔をされても困るよ!！」

「私も終わりました!！」

「ボクはもう少し」

瑞希ちゃんはテストを受け終わり、工藤さんはもう少ししかるみただ。

「そうか、工藤はそのまま受けていてくれ。俺と明久に姫路、それからその他でDクラスの本陣へと向かう」

どうやらそろそろ仕掛けるようだ。

僕達が教室を出て、Dクラスへと向かうと、陰に隠れていた敵が現れた。

どうやら、代表が出てくるのを待ち伏せていたようだ。

『Fクラス代表に風間響が仕掛けます試獣召喚！』

「Fクラス吉井明久が受けます！ 試獣召喚！！」

ちなみに、召喚を仕掛けられたら応じなくてはいけない。

もし逃げたら敵前逃亡で戦死扱いになる。

そして、誰かが代わりに受けることは可能。

ちなみに、姉さんについてきてもらってるので教科は英語。

英語

Dクラス 風間響 102点

Fクラス 吉井明久 200点

「ハアアアアア！？」

「うるさいな」

「明久、この点数はなんだ！？」

「去年から瑞希ちゃんや姉さんに教えてもらっていたんだよ……観
察処分者になつたあとから」

「な、そうだったのか!? ……そうか、あの後なら俺達が知らな
かったのもうなずけるが……この点数はいつたいなんだ!?」

まあ、去年の点数と比べると天と地ほどの差がある。

『な、なんでこんな奴がFクラスに!?!』

驚いてるな

『ま、負けるかああ!! 所詮はFクラスだ!?!』

そして突っ込んできたが……

ヒョイ

『え?』

僕は観察処分者だ。だから召喚獣の扱いに関しては教師レベルだ。

「えい!」

ただ、僕の召喚獣の装備が決定された時点では改造ガクランに木刀
だったため、武器や防具は貧弱だ。

それでも、この操作技術と点数なら。

Dクラス 風間響 0点

Dクラスなんて敵じゃない。

僕達必要なくね!?

「姫路、やってくれ」

「は、はいっ」

「鬼だ!?! 鬼がいる!?!」

これ以上の戦力投入はオーバーキルだよ!?

「アレ? 姫路さんどうしたの? Aクラスは自習中じゃなかった?」

「Fクラス、よし……姫路瑞希がDクラス代表に勝負を申し込みます!」

「は、はあ」

あれ? 姫路さん、なにか変なこと言いかけなかった?

「^{サモン}試獣召喚!」

「さ、^{サモン}試獣召喚」

現代国語

Fクラス	姫路瑞希	339点
Dクラス	平賀源二	129点

うわあああ……圧倒的。

「し、ごめんなさい!」

「え、えええ！？」

こうして、僕達はDクラスに勝利した。

第四問 対決Dクラス（後書き）

安心の明久微改造（笑）

魔改造ではない。霧島とかに比べたら低いだろ。

だから微改造……微妙に改造……ズべったか。

明久が腕輪を使うとどんな特殊能力になるんだろう？

個人的には、物理干渉があるから使えない気がする。

あ、学園長の策略で発動キーワードを教えないとかいいかも。

一応、意見募集。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3259z/>

元バカとテストと召喚獣 + カオスなFクラス

2011年12月14日14時45分発行